

排便コントロール不良患者に ビフィズス菌含有食品を使用した症例の検討

福井県 福井大学医学部附属病院 栄養部¹ 消化器外科²
 間脇瞳¹ 北山富士子¹ 立平宏美¹ 片山寛次²

目的

経腸栄養法の施行、消化器疾患、抗生剤の長期投与などにより、下痢や便秘が惹起されることが多い。その要因のひとつとして腸内細菌叢の乱れが挙げられ、その改善を図るためにプロバイオティクス投与が有効であるとされている。当院では数年前より乳酸菌飲料や発酵乳使用による排便状況改善例を経験している。その際、血糖コントロールや水分投与量の増加が問題となり、それらの使用が困難な症例も出てきた。そこで排便コントロール不良患者にビフィズス菌末BB536[(株)クリニコ]を投与し、排便コントロールに及ぼす影響を検討した。

方法

【対象】 乳酸菌飲料や発酵乳の投与が困難で、下痢や便秘の症状を有する患者8名
 (平均年齢71歳、男性6名:女性2名)。

【投与方法】 ビフィズス菌末BB536 を1日1本(朝)または2本(朝と夕)を白湯に溶かして投与した。
 経腸栄養をしていない患者には、GFO[(株)大塚製薬工場]も同時に1袋ずつ投与した。

【投与期間】 4日~1ヵ月半(個人差あり)

【試験食品】 ビフィズス菌含有食品

製品名:ビフィズス菌末BB536(1本2g当たり *Bifidobacterium longum* BB536を500億個配合)

【観察・評価】 ビフィズス菌末BB536投与前後の排便回数および排便性状について評価した。

結果

●ビフィズス菌末BB536投与前後の比較

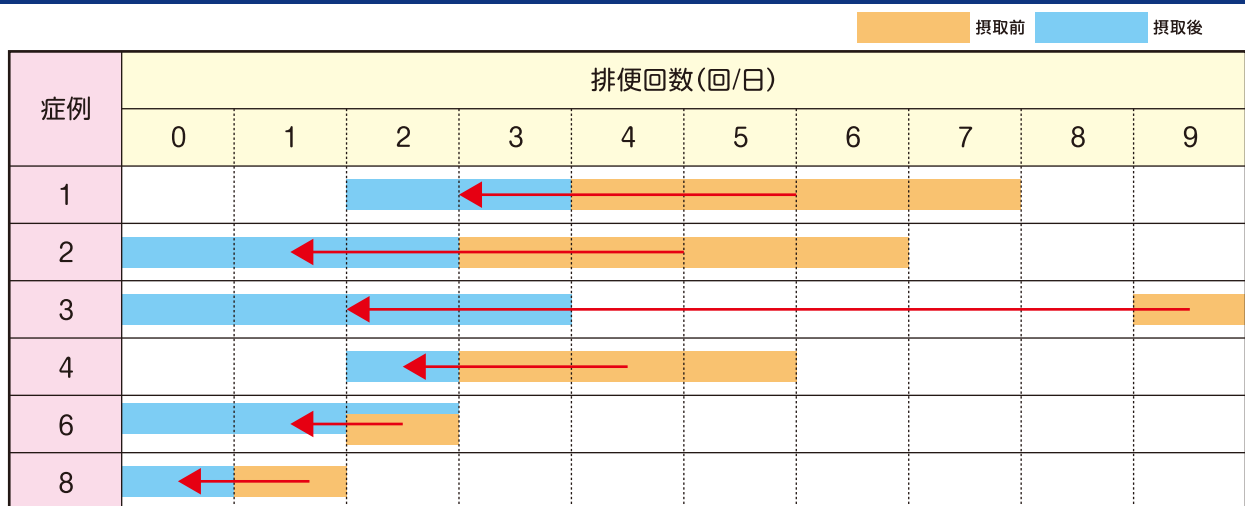
症例	年齢・性別	栄養投与方法	BB536 投与量(本)	BB536 投与期間(日)	排便回数(前) 便の性状(前)	排便回数(後) 便の性状(後)	抗生剤 使用	整腸剤 使用
1	80代女性	経腸栄養	1	15	4~7回/日 泥状便	2~3回/日 軟便	-	+
2	60代男性	経腸栄養	1	32	3~6回/日 タール便	0~2回/日 普通便	+	+
3	60代男性	経腸栄養	2	41	9回/日 緑色粘性便	0~3回/日 普通便	+	+
4	70代女性	経口	2	4	3~5回/日 消化不良便	2回/日 軟便	+	+
5	50代男性*	TPN	2	27	多量 下痢	量減少 下痢	+	-
6	70代男性	経腸栄養	2	14	2回/日 粘土様便	0~2回/日 普通便	-	+
7	70代男性*	TPN	2	40	多量 緑色水様便	多量 緑色水様便	+	+
8	60代男性	経腸栄養	2	43	1回/日 硬い便	2~3回/週 普通便	-	+

*経肛門ドレーン、人工肛門あり、排便回数不明

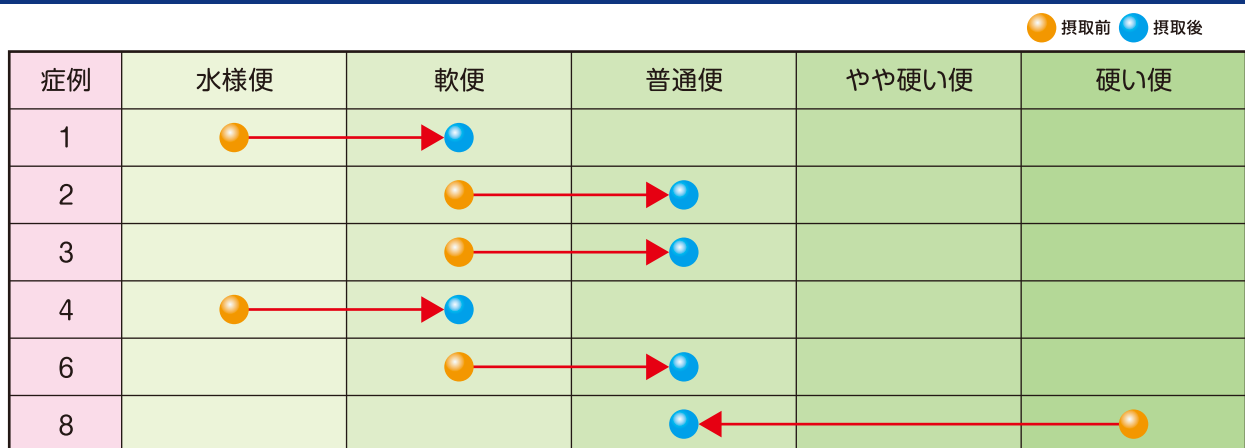
考 察

- 経腸栄養、および経口摂取を行っていた6症例(症例1、2、3、4、6、8)において、排便回数が減少した(図①)。
- 投与前に下痢であった全5症例(症例1、2、3、4、6)において、便性状が下痢から有形便となり、普通便に近づいた(図②)。
- 投与前に便秘であった1症例(症例8)において、硬い便から普通便に便性状の改善が認められた(図②)。また、腹部膨満感が緩和されたという言葉が聞かれ、下剤使用量も減少した。
- TPNの症例5については下痢症状の改善傾向が認められた。変化のみられなかった症例7は、侵襲の大きな術後であり、全身状態が著しく悪かったことが影響していると考えられる。

図① 対象者の排便回数の変化



図② 対象者の排便性状の変化



結 語

- 今回使用したビフィズス菌末BB536は、TPNを施行していた特別な1症例を除くすべての症例で便性状改善傾向がみられ、排便コントロールをするうえで有用な食品であることが示唆された。
- 今後は、乳酸菌飲料や発酵乳の投与が困難な症例に対する、効果のある食品の1つとしてビフィズス菌含有食品を選択していきたい。